

「おとふけ」の 伝承

私たちのふるさと「おとふけ」。先人たちの労苦があり、いま、私たちの住む「おとふけ」がある。広報おとふけでは、音更町に根をおろし、ふるさとを築いてきた人たちの後世に語り継ぎたいお話しを紹介しています。



江崎 壽男さん
昭和2年1月1日生まれ。
字下音更(鈴蘭)在住

私の生い立ちと

幼少時代の思い出

私 は昭和2年1月1日、自宅がある鈴蘭地区で生まれました。父は大正2年に岐阜県から北海道に移住して農業を始め、私は3代目になります。

小学生の頃、鈴蘭川上流の土橋の下でフキの皮の筋を取ってミミズを縛り、河原で折った柳の枝にぶら下げて魚釣りをしたことや、先輩たちが学校に続く沢でアオダイショウを捕まえて遊んでいたことなど、とても楽しかった思い出があります。

しかし、高学年になってからは、兵隊さんの見送りや、家の畑を手伝う時間が多くなりました。

航空隊に入隊、朝鮮へ

昭

和18年、鈴蘭高台への飛行場建設のため、私の家に立ち退き命令があり、父は全ての財を使って、新たに札内で5町歩の土地を取得しました。

昭和19年8月、私は志願して海軍航空隊に入隊。翌年5月に博多港から朝鮮(韓国)の釜山港を経由して鎮海に入りました。そこでは垂木をレールがわりに土を積んだトラックを押すという過酷な労働が続き、予科練の元気のいい青少年でも、栄養失調や皮膚病で働けなくなりました。

8月15日に終戦、武装解除後は米軍の接収要員となり、各基地を整備し米軍に渡す労役につきました。その後、昭和20年10月5日に札内の自宅に帰りましたが、そのとき我が家には一粒の米さえ残っていませんでした。

鈴蘭での自作農

戦後農業の変遷

昭

和22年、農地改革により88000円で兄名義

の土地10町歩の払い下げを受け、単身で札内から鈴蘭に戻り就農しました。当面は一人で頑張るつもりでしたが、私の身を案じた近所の人の紹介で、同年、妻のフミと結婚。長男が生まれても着せる服がないほど困窮し、冬には十勝川沿いで亜炭掘りをして生活費を稼いだこともありまし

た。昭和23年には木野農業協同組合が設立され、組合員は初めて肥料を使い、安定収量を期待できるようになりました。

また、昭和30年代に農業改良普及所と農協が一体となった指導体制が構築され、農業技術はもろろん家庭生活や文化活動など様々な指導・助言を受けて、農村部の暮らしは大きく変わっていきました。

昭和50年代から下音更全域の土地改良事業が始まり、9年かけて、道路・排水路の整備、河川改修などが行われました。

亡き妻への感謝と

親子で繋ぐ農業百年

妻

は4人の子どもを育て、59歳でこの世を去りました。いつも明るく踊りが大



北海道移住百年を記念して自宅の庭に建立した記念碑

好きで、多くの人にかわいがられた人生でした。寝たきりの私の父を7年間介護し、常に自分を支えてくれた神様のような存在で、本当に感謝しています。先立たれた時は途方に暮れましたが、果樹栽培や庭作りなどに打ち込み乗り越えてきました。

平成25年、江崎家は初代判治郎が幕別町途別に入植以来、北海道移住百年を迎え、庭に記念碑を建立しました。孫の泰嘉で5代目、農業の形は変われども、自分一人の力ではなく、周囲の人たちと心を通わせ助けあつてきたことで今日があります。このことを決して忘れず、今年開基百年を迎える「鈴蘭」を未来に受け継いでほしいと願っています。